欠損補綴の目的から考える
～劇的に機能させるパーシャルデンチャーのデザイン～

奥森健史

日常臨床では、多くの割合で機能の回復、審美性に改善を目的とした補綴治療を必要とされています。また、インプラントによる術式や概念も着実に構築され、一時代を通過してきました。そういった欠損補綴における選択肢の中で、可撤性装置であるパーシャルデンチャーやインプラントを含むオーバーデンチャーも重要なオプションではないでしょうか。換言すれば欠損部に対し口腔模倣を原則とした咀嚼ユニット{人工歯・義歯床からなる部分、または、上部構造体}をいかに適正なポジションに回復し、それらの生理的機能を担保とした“力”に対し口腔内にてどう維持・安定させるかが勘所となります。患者可徹性装置、術者可撤性装置、いずれにせよ上下顎の欠損状態からアイヒナーの分類や“咬合支持指数”などで補綴治療終了後にその予後のリスクも予測し再介入時の“次の一手”を考えておくことも必要ではないでしょうか。そこで、今回は、欠損歯列における“支台装置への力学的考察”と“咀嚼ユニットの動きをコントロール”部分をターゲットに絞って考察したい。口腔模倣において、歯を復元させるプロセスには、“色”“形態”という目に見える部分と、それらが歯列として、一体化しそこへ加わる機能的考察すなわち目には見えない“力”という部分をどうコントロールするのか、ラボサイドにおいてもその部分を押さえて日常臨床に生かせれば、高い水準でドクターサイドとのコラボレーションにつながるのではないでしょうか。歯科技工術式に都会も地方も県境はございません。私{奥森}は、奈良県で生まれ、右も左もわからない歯科技工士業界に、飛び込んで早いもので３０年、和歌山のお隣、奈良から一歩も出ることなく今まで臨床をこなしてまいりました。そのヒストリーもノンフィクションでお話できれば幸いです。